

## ★ベンガル語：文語体から口語体へ★

概要：ベンガル語は、1000年ほどの歴史を持っていますが、公用語として用いられるようになったのは比較的最近で、それ以前はもっぱら文学によって牽引されてきたと言ってもよいでしょう。そのベンガル文学では、1910年代から文語体から口語体へことばの上での大きな変換が起こり、その際、若い世代がもっぱら口語体で作品を書くようになったのみならず、ノーベル賞詩人タゴールのように文語体でそのキャリアをスタートさせた世代も、積極的に自らの用語を口語体へと切り替えていったのです。タゴールが初めて完全口語で書いた小説、『家と世界』は当時の読者に大きな衝撃を与えましたが、それは口語というスタイルによってもたらされた部分も少なくありません。また、韻律を大切にす詩の世界では、口語で書くにあたって乗り越えなければならぬさまざまな問題もありました。本講座では、そのような文学の世界でのことばの変化、それによってもたらされたもの、失われたもの、試行錯誤などの文学史上の一コマをご紹介します。

## 1) ベンガル文学のことばと文語体

## ○ベンガル語の発展…

10世紀ごろから文学用語としてのベンガル語が発達

## ○ベンガル語の起源と周辺…

東部アパランシャ語から発達し、アッサム語、オリッサ語、マイティリ語と近い。アッサム語はほとんど文字が同じ。マイティリ語もベンガル文字を用いていた時期がある。オリッサ語は文字は異なるが文法的にはかなり近い。かつてはマイティリが文学上の東部の中心だったこともあり、ベンガル詩人もマイティリを用いることがあった。また中世にはこれらの混交したブラジブリを用いて詩編が書かれたこともある。

## ○ベンガル語の東西…

基本的にバングラデシュとインド側西ベンガル州との書き言葉は同一である。

## ○Sadhu bhasha (文語) と Calit bhasha (口語) というふたつの「文章表現」…

民俗歌謡やチャラなどの口承文芸はそれぞれの「方言」が用いられることが多く、このふたつの writing system が反映されるわけではない。つまり「文語」と「口語」が問題になるのは書き言葉においてのみ。当然のことではあるが、ベンガル文学は「書き言葉」の外に広がりを持つので、その点に注意されたい。

## ○書き言葉の流れ…

文語体のみ (19世紀まで) ⇒ 文語・口語の混在 (20世紀前半) ⇒ 口語体のみ (現在)

## 2) 文語体 (Sadhu bhasha) と口語体 (Calit bhasha) の比較

## ① 動詞の活用形 (例: kara 「する」)

現在進行形

文語	karitechi	karitecho	kariteche	karitechen
口語	karchi	karcho	karche	karchen

現在完了形

文語	kariyachi	kariyacho	kariyache	kariyachen
口語	karechi	karecho	kareche	karechen

## ② 代名詞

文語	tahar	kahar	ihar	yahader
口語	tar	kar	er	yader

## ③ その他の語彙

文語	mastak	nritya	bibaha	samasta
口語	matha	nac	biye	sab

⇒ 文語ではサンスクリット語の語彙が多用される傾向がある。全体として口語は平易で軽い印象を与えるのに対し、文語は構造的にも複雑になりがちで重たい印象を与える。

## 3) 口語体への提言

## ○ プロモト・チョウドリ (1868-1946) の口語体推進…

プロモト・チョウドリは詩人および作家。ビールバルの筆名でも知られる。ちょうどタゴールがノーベル賞を受賞したころ、プロモトは頭角をあらわしはじめ、口語体への提言を行うようになる。

## ○ プロモトの主張…

① わたしたちが努力すべきことは、ベンガル語の話し言葉と書き言葉の統一性を守ることであり、それを妨げることではない。

② わたしは必ずしもサンスクリット語の語彙の使用に反対するわけではないが、無制限かつ無自覚に使うことは、文言の理解を妨げる。

## ○ 「Sabujpatra (緑の葉)」(1914-) の発行と口語体推進のための運動…

タゴール (1861-1941) はプロモト・チョウドリの運動を支持。散文作品を口語体へ切り替える。1916年に始めて来日した際に Sabujpatra に書き送った紀行文 (のちに『日本旅行者』として単行本化) は、全篇口語体で書かれている。

(タゴールは1881年の『ヨーロッパ滞在通信』を口語で書いて以来、ずっと文語を使用)

## 4) タゴールの小説にみる口語体への変換

## 長編小説

年号	原題	日本語訳	文体
1883	Bau-thakuranir hat	兄嫁の市場	文語 (会話も文語)
1887	Rajarshi	聖王	文語 (会話も文語)
1903	Chokher bali	目の砂	文語 (会話も文語)
1906	Naukadubi	難破	文語 (会話も文語)
1908	Prajapotr nirbandha	蝶の願い	文語 (会話は口語)
1910	Gora	ゴーラ	文語 (会話は口語)
1916	<b>Chaturanga</b>	四楽章	文語 ※1
1916	<b>Ghare baire</b>	家と世界	すべて口語 ※2
1929	Yogayog	交流	すべて口語 ※3
1929	Shesher kabita	最後の詩	すべて口語
1933	Dui bon	二人姉妹	すべて口語
1934	Malancha	花園	すべて口語
1934	Char adhyay	四つの章	すべて口語

※1…1人称小説で、会話部分が地の文と渾然一体となっている。(カギカッコなし)

※2…3人の登場人物のそれぞれの独白というスタイル

※3…地の文、会話文ともに口語

## 5) 1900年代～40年代の動き

1905年 ベンガル分割令および反対運動

1913年 タゴールがノーベル文学賞を受賞

1914年 第一次世界大戦勃発

1919年 ローラット法裁可と第一次非暴力運動

1929年 **ビブティブション・ボンドパッダエの『大地のうた』(会話のみ口語の文語体)**

1930年 第二次非暴力運動

1939年 第二次世界大戦の始まり

1941年 タゴール亡くなる

1944年 **タラションコル・ボンドパッダエの『吟遊詩人』(会話のみ口語の文語体)**

1947年 インド・パキスタン分離独立

1951年 **タラションコル・ボンドパッダエの『ハンスリ・バンクの物語』(すべて口語)**

※ビブティブション (1894-1950) タラションコル (1898-1971)

## 6) 詩編における口語体

## タゴールの詩の変遷 (抄)

年代	原題	日本語訳	文体
1882	Sandhya Sangit	夕べの歌	韻律詩※1
1884	Bhanusimha Thakurer Padabali	バヌシムハ・タクルのホダボリ	ボイシュブの文体※2
1894	Sonar Tari	黄金の舟	韻律詩※3
1906	Kheya	渡し船	韻律詩
1909	Shishu	幼子	韻律詩
1910	Gitanjali	ギタンジョリ	韻律詩
1914	Gitimalya	歌の花輪	韻律詩
1916	Balaka	渡り飛ぶ白鳥	韻律自由詩※4
1925	Purabi	プロビ	韻律詩
1932	Punashca	ふたたび筆を	散文詩※5
1936	Patraput	木の葉の皿	散文詩
1940	Rogsajyay	病床にて	韻律詩
1941	Shesh Lekha	絶筆	韻律自由詩

※1 初期の詩編にはポヤル (後述) が多く見られる。また、詩編では韻律が優先されるため文語と口語が混ざっている。

※2 中世ボイシュブ詩人と同じくブラジプリ (現代ベンガル語と異なる) で書いたもの。

※3 タゴールはベンガル韻律そのものを大改編しており、韻律形は多様である。

※4 韻律には従っているが、パターンが自由であるということ。

※5 タゴールは散文詩によって完全口語を実現した。

○ベンガル詩は従来ポヤル (Mishrabritta, 8, 6) と強く結びついていた。

例: ami kemon koriya janabo amar (8, 6 Mishrabritta)

Aji giyechi sabar majhare, sethay (8, 6 Mishrabritta)

⇒一律に口語にすると韻律が崩れることになる。

○ブッドデブ・ボシュの「マニフェスト」…

1943年出版の『ドモオンティ』序文で、これまで許されていた文語と口語の混在をなくすこと、サンスクリット起源の単語を用いる場合は、日常用語として使われているものに限ることなどを訴える。

例: ghas halo ghono megh; swaccho jal jame ache mathe (8, 10 Mishrabritta)

Gatabachar esechilam, buker madhye besechilam tomay bhalo (4, 4, 4, 4, 4 Dalbritta)

※タゴール後の詩人たちは韻律形を用いつつ完全口語化へ

## 7) 得られたもの、失われたもの

口語とは何か…

- 「話し言葉＝口語」ではない。
- 「口語 v. s. 文語」は、「新しい文体 v. s. 古い文体」とも重なるものがある。

口語への指向の動機…

自分が本来持っているものの発見／自分本来の気持ちをあらわそうという欲求／過去の權威の否定／民族意識の高揚／ことばの躍動感

ベンガル語は「俗なるもの」でサンスクリット語は「聖なるもの」という概念

↓

ベンガル語は「われわれのもの」でサンスクリット語は「異なるもの」とあると言う概念

参考)

「やまと歌は人の心を種としてよろづの言の葉とぞなれりける」

(古今和歌集・仮名序・紀貫之)

「国民語の資格を得ていない漢語は使わない。例えば、行儀作法という語は、もとは漢語だったろうが、今は日本語だ、これはいい。しかし挙止閑雅という語は、まだ日本語の洗礼を受けていないから、これはいけない。…日本語にならぬ漢語は、すべて使わないというのが自分の規則であった。」

(余が言文一致の由来・二葉亭四迷)

付録) 日本における文体の変化

- ① 樋口一葉 (1872-1896) 「十三夜」(1895)
- ② 夏目漱石 (1867-1916) 「夢十夜」(1908)
- ③ 志賀直哉 (1883-1871) 「城の崎にて」(1917)
- ④ 中島敦 (1909-1942) 「山月記」(1942)

参考文献

- 『タゴール著作集別巻』タゴール研究 第三文明社
- 『言文一致体の誕生』橋本治 朝日新聞出版

kata ajānāre jānāile tumi, =6,6  
 kata ghare dile ṭhāi — =6,2  
 dūrke karile nikaṭ, bandhu, =6,6  
 parke karile bhāi / =6,2  
 purāno ābās cheṛe yāi yabe =6,6

gatabachar esechilām, buker madhye besechilām =4,4,4,4

tomāy bhālo =4

ekhan sandhyā hayeche ghor, kebal meghe-meghe-meghei =4,4,4,4

din phurālo =4

ekhan nithar rātribelā =4,4

jaler dhāre keballi hay jaler khelā =4,4,4

abartamān tomār hāsi jhāuyēr phāke =4,4,4

āmāy gabhīr rātre ḍāke =4,4